生き物エピソード　part1

こんな生き物が!?と
おどろいたエピソード

撮影：大沢夕志氏

入間市のヒナコウモリ初記録（2016年3月17日）　MAP-①

2013年頃から、案内所の壁からチュウチュウと声が聞こえることがありました。コウモリかもしれない！ということで専門家に調べてもらったところ、入間市では初確認となるヒナコウモリが壁の内側を越冬ねぐらとして利用していることが分かりました。
ヒナコウモリは毎年12月から3月ごろまで越冬しています。まだ詳しい生態が不明なコウモリなので、安定した越冬場所はとても貴重です。

ガビチョウふえる

中国原産の外来生物のガビチョウは1990年代終わりごろから日本各地で野生化しており、みどり森で最初と思われる記録は2004年です（参考：入間市の野鳥Ⅲ 2006年発行）。
スタッフはこの15年間でガビチョウの生息密度や分布はさらに増したと感じています。とくに2024年～2025年は、近隣の住宅地にまで確認され、分布拡大の勢いがうかがえました。
やぶの中を好む習性があり、同様の環境を好むウグイスなどの野鳥の生息に影響しないか心配されています。

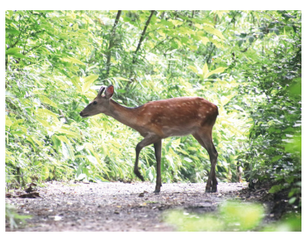
撮影：平松毅久氏

新種クモの発見（2020年）　MAP-②

クモ類の研究家の平松毅久さんが大谷戸湿地で発見したクモはアメイロカラカラグモと名付けられ、新種記載されました。カラカラグモは体長2mm前後と極小のクモ。目にしたとしても子グモかな？と思うでしょう。
平松さんはその後もこのクモの調査を続け、徐々にその生態が明らかになってきています。

タマヤスデ類の未記載種発見（2022～2023年）

学芸員実習にきていた東京都立大学の学生が、ちょっとかわったタマヤスデがいると気づいて研究室に報告したところ、採取したタマヤスデ類のDNA解析調査が行われ、2023年にタマヤスデ類としては未記載種と確定しました。

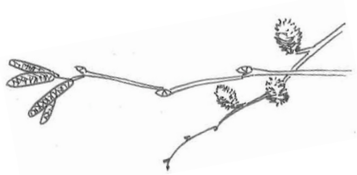


狭山丘陵にシカあらわる（2022年7月3日）　MAP-③

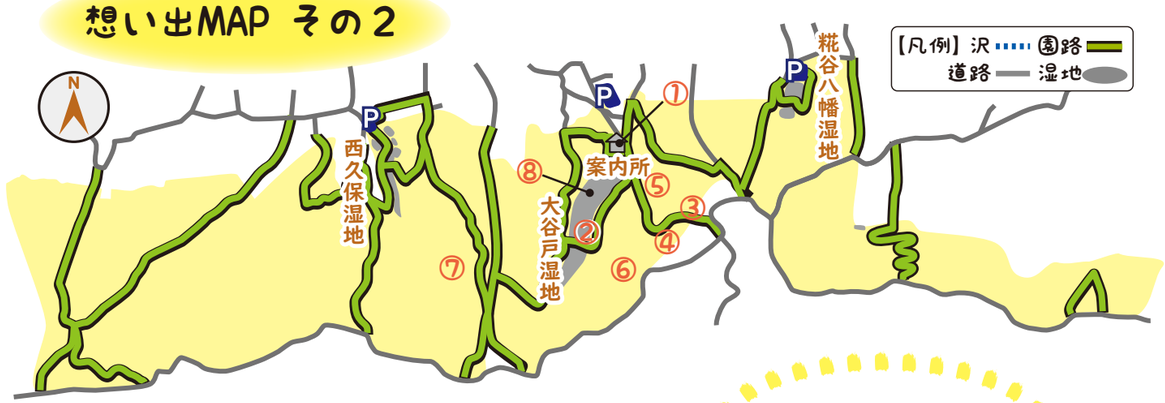
今朝ここでシカを見た！というお客様が案内所にいらっしゃいました。お客様のカメラには、道に優雅にたたずむ若いオスジカ1頭が写っているではありませんか。
その後も狭山丘陵内あちこちで同一個体と思われるシカが目撃されたり自動撮影カメラに写ったりしていましたが、11月を最後に消息不明となりました。

14年目に初認となった樹木ミズメ（2024年2月）　MAP-④

雪の日の巡回で見慣れない特徴の枝を拾い、調べたところミズメと判明しました。園路からほど近く高さ20m以上の大木にもかかわらず、管理14年目にして初めての確認。狭山丘陵ではまれな山地性の樹木です。嬉しい発見となりました。



想い出MAP　その２



生き物エピソード　part2

生き物たちの生態を
かいまみたエピソード

フデリンドウ保護作戦（2012年）　MAP-⑤

冬に、柵の修繕で重機が入るため、道沿に生えている希少なフデリンドウの株をプランターに保護することにしました。プランターで冬を越したフデリンドウは日光をたくさん浴びたせいか葉のつやもよくなり、工事終了後にもとの場所に植え戻すと、春にはいつも以上に花を咲かせました。
落ち葉かきが盛んだった昔は、フデリンドウも冬の日差しを浴びてもっとたくさん見られたに違いない、と思いました。

越冬中（1月）

開花（4月）

キツネの巣穴（2017年ころ）　MAP-⑥

ボランティア団体が活動するエリアの更新伐採をしたところ、翌年、伐採地の斜面をキツネが子育て場所として穴を掘って利用したのです。普段はひっそりとして人気もなく、開けた空間がちょうどよかったのでしょう。やがて木が成長して林になってくると巣穴は利用しなくなりました。

ノウサギ、萌芽枝大好き？　MAP-⑦

雑木林を伐採すると、翌年切り株から新たな枝が伸びます（萌芽枝）。そんな新しい枝を冬にはノウサギが冬に好んで食べるようで、調べたところ、伐採から1～2年はノウサギによる食痕が多く見られました。
伐採することで萌芽枝が伸びるだけでなく、地表に光が届きやわらかい草も生えます。伐採後1～2年がノウサギにとってちょうどよい食事場所なのでしょう。

足環をつけたアオジ

鳥類標識調査（バンディング）（2020年～）　MAP-⑧

鳥類の渡りなどを解明し、保護を推進することを目的とした鳥類標識調査が有志のボランティア調査員により行われてきました。更に、みどり森のスタッフもバンダーの資格をとって調査を継続することができました。
みどり森で足環をつけられたアオジが1年後に戻ってきたことや、北海道釧路市から渡って来たアオジがいることなどが分かってきました。長期的に行うことが大切な調査です。